

第49回全国消防職員意見発表会文集

令和8年5月28日
御園座（名古屋市）

全 国 消 防 長 会

意見発表（発表順）

- 1 東海支部（菰野町消防本部）
秦 昂 大 『仲間の命を“見える化”
～生きて還るための大きな一歩～』
- 2 東近畿支部（福井市消防局）
谷 口 竜太郎 『未来の消防士へ』
- 3 近畿支部（泉大津市消防本部）
松 浦 真 也 『ここに力を注ぎたい』
- 4 中国支部（東備消防組合消防本部）
有 吉 彩 華 『命を守る声のカタチ』
- 5 四国支部（西予市消防本部）
赤 松 一 樹 『「予備消防職員制度」
任期付短時間勤務の消防職員として』
- 6 九州支部（天草広域連合消防本部）
戸 田 開 斗 『ポイントで広げる救命の輪』
- 7 北海道支部（札幌市消防局）
荒 木 敬太郎 『火災除染で職員の健康と市民の安全を守る』
- 8 東北支部（一関市消防本部）
千 葉 友理恵 『ワンストップ救急子育てサポート』
- 9 関東支部（桐生市消防本部）
関 口 雄 大 『もう一つの使命』
- 10 関東支部（横浜市消防局）
佐 藤 文 哉 『手話を消防の第2言語に
～災害現場に“共通の手”を～』

審 査 員

【審査員長】

（敬称省略）

- ・青柳 知敏（株式会社中日新聞社 名古屋本社編集局 次長）

【審査員】

- ・旭堂 鱗林（講談師）
- ・河端 勝彦（北海道支部：旭川市消防本部消防長）
- ・名畑 徹（東近畿支部：京都市消防局長）
- ・西川 宜孝（四国支部：高知市消防局長）

（注）発表者原文のため、実際の発表内容と多少異なる場合があります。



仲間の命を“見える化” ～生きて還るための大きな一歩～

東海支部代表

秦 昂 大

菰野町消防本部（三重県）

秦さんは、どのような物事に対しても非常に真面目に取り組み、コツコツと結果を積み上げることができる誠実な人柄で、周囲からの信頼も厚くこれからを担う逸材です。

「濃煙の奥へと消えていく、仲間の背中。それが彼を見た最期の姿となった。」これは決して他人事でも、ドラマの話でもありません。私たち消防官が、今、この瞬間にも直面しうる「最悪の現実」です。

私たちは火災出動の際、二十kgにも及ぶ装備で身を固め、人命救助と火勢鎮圧のため、煙で視界が悪く、凄まじく燃え盛る炎の中を、一步、また一步と進みます。その責任ある任務の裏側には、常に死の影が潜んでいます。見失うかもしれない脱出経路・巻き込まれるかもしれない急激な火炎の噴出・無情にも鳴り響くボンベの残圧警報。一瞬の判断ミスやわずかな情報の欠如が、仲間の命を奪います。

近年、屋内進入中に殉職する事案が後を絶ちません。これは今、私たちの現場で起きてもおかしくない現実です。その恐怖に屈することなく、私たちは果敢に炎に立ち向かい、指揮隊は必死に声を張り上げ無線を飛ばします。しかし、「今、どこで、誰が、どのような活動をし、どのような状態にあるか」、濃煙と熱気に包まれた複雑な建物内で、活動する隊員を管理することには、限界があります。

皆さん、隊員一人ひとりを把握するために、何か方法はあるでしょうか。そこで私は提案します。「現場から生きて還るための、最強の見える化システムを」本提案を二つのポイントに分けて示します。

第一に、IP無線機の活用です。具体的には進入口や屋内に設置したWi-Fiビーコンを起点として、IP無線機までの距離から屋内に進入している隊員の位置情報を取得します。これにより、GPSの電波が届かない屋内でも「どの階、どの区画にいるのか」を正確に把握します。

同時に、IP無線機に搭載されているカメラの映像を図面作成ソフトにインプットさせることで、瞬時に建物の構造を把握することも可能になります。例えば、進入している隊員が緊急事態に陥った際、指揮隊は言います。「隊員は二階のこの区画のこの場所にいる。救出にむかえ!!」と、

確実なルートを指示することができます。

第二に、スマートウォッチの導入です。指揮隊の隊員管理モニターが、隊員のバイタルサインと体動の有無をリアルタイムで把握し、異常を察知した瞬間警告を発します。「どこで、誰が、どのような活動をし、どのような状態にあるか」が一目で分かります。見える化システムの導入で、殉職事案ゼロへ！私たちは命を守る組織へと変わらなければなりません。

消防官にも帰りを待つ家族がいます。現場で戦う私たちは組織の一員である前に、誰かにとってかけがえのない、宝物です。「今日も無事でよかった」。その一言を、すべての隊員が、すべての家族が交わせる未来を、約束しなくてははいけません。

皆さん、仲間の命が見える化することは、組織としての最強の安全管理です。濃煙の奥へと消える背中を、「最期の姿」にはさせません。仲間を必ず生きて還す消防へ!! その揺るぎない覚悟を胸に、最強の消防を共に創り上げましょう。



未来の消防士へ

東近畿支部代表

谷口 竜太郎

福井市消防局（福井県）

平成28年4月1日に消防士を拝命して以来、火災、救急、救助と幅広い業務に従事し、現在は、高度救助隊として人命救助に強い信念と情熱を持ち、日々の活動に真摯に取り組んでいます。上司や同僚からの信頼も厚く、将来を嘱望される職員として期待されています。

私は、消防と市民との関係が、近いようで少し遠いと感じることがあります。ある日の夕方、訓練を終えたときのことで。1人の男子高校生がどことなく落ち着かない様子で自転車を止め一言。

「僕は将来、消防士になりたいのですが、消防署に何うのもいつも勇気がなくて。でも今日は話しかけやすそうなお兄さんを見つけたので、話しかけてみました。」

私はその言葉を聞いたとき、未来の消防士との間になぜか遠い距離間を感じました。同時に、消防は憧れでありながらも近づくには勇気が必要な世界になっており、未来の消防士を迎えるには勇気を生むきっかけが必要だと確信しました。

その原因と解決策として次の2つを挙げます。

1つ目は、業務以外で消防という組織と市民が触れ合うイベントが少ないことです。私たちは火災予防運動や避難訓練を通して市民と関わるがありますが、航空自衛隊では航空祭と呼ばれる普段の訓練の成果を披露し基地を見学できるような場が多く設けられています。これらは現場の空気感や迫力を肌で感じることで「平和の担い手に自分も関われる」という感覚を生む大きな機会となっています。また、アメリカの消防では夕方に保護者の迎えを待つ子どもたちを消防署に受け入れ、スポーツをしたり親睦を深めたりなど、市民の「安心の拠点」として大きな存在となっています。私たちも定期的に消防署を一般開放したり、季節のイベントに消防として参加したりとカジュアルに交流できる場を増やしていく必要があるのではないのでしょうか。

2つ目に、消防広報を市民が目にする回数が少ないことです。即ち消防に興味のない人は自ら進んで情報を得ようとしないのが現状です。消火や救助の技術が目覚ましく進化するように広報という分野もまた、時代に合わせて進化しなければなりません。例えば消防署の壁面に大規模なプロジェクションマッピングを1年中楽しめる形で映し出し、街の顔として育てることで、誰もが目を

引くような広報を実施するのはどうでしょうか。情報が瞬く間に広がる今、選ばずとも情報が目に入る回数を増やすことで、これまでにない広報力が生まれるはずです。そして、このような先進的な取り組みを実施し継続するためにも消防の未来を創る重要な戦略チームとして各本部に消防広報課を確立させるべきだと考えます。

私は「未来の消防士」を育てる情報発信や体験のチャンスをさらに増やしていく必要があると考えます。これからの世代が憧れではなく目指す選択肢の1つとして消防を捉える社会を作るためには、消防組織自らが未来の消防士を育てる視点を持つことが必要です。そして、次の世代に向け、扉を開き続ける姿勢こそが次の100年をつくる大きな力になると私は信じています。

私たちの役割は「今の命を守るだけでなく、未来の命を守る人を育てること」その土台を作るのは、今を生きる私たち消防職員です。

「未来を託す先輩より」



ここに力を注ぎたい

近畿支部代表

松浦真也

泉大津市消防本部（大阪府）

アニメや読書をこよなく愛し、豊かな語彙力と親しみやすい人柄を兼ね備えています。その高い対話スキルを防火指導で発揮し、市民からの信頼も厚い予防課歴7年目の職員です。

今回は、災害出動と予防業務を兼務する中で、限りある時間の使い方を工夫しながら、市民のためのコア業務に力を注ぎたいとのテーマで発表します。

イギリスの思想家であるオリバーパークマンは

「人の一生は、わずか4000週間しかない」と述べています。

私たちの一生は平均して約80年

これを週に換算するとおよそ4000回で一週間はあっという間に過ぎていきます。

この「限られた時間」という視点で消防の業務を見つめ直した時、どこで時間が使われ、どこに時間を使うべきなのかを改めて考えるようになりました。

私の目標は住宅火災を0。万が一、発災しても死傷者を出さない。そのためには防火訪問を通じて、事前に危険の芽を摘み取ることが重要です。

私が以前、防火訪問に伺った際、お話好きの高齢者の方で一件の訪問にかなり時間を要しましたが、その中で生活動線を一緒に確認し、実態を知ることができ、個々に寄り添った防火指導ができました。その方自身が危険に気づき「この前の話、ためになったわ。また、近所の人にも行っただ」と電話をいただき、寄り添うことで防火意識は押し付けではなく、自然に高まることを実感しました。

市民の方々と直接関わる業務は、じっくりと時間をかけて、人と向き合うことが重要であり、「ここにこそ時間と人を費やすべきであると強く感じました」

現在、救急隊員も兼ねながら予防業務に従事していて、救急需要の増加により事務処理時間がなかなか取れず、出場から戻ると法令等の調べものが積み重なっている。

法令等を調べているとまた出場、「皆さん、そんな経験ないですか？」

とても時間を費やすことが多々あります。「避けることのできない現場活動時間、時間をどうにかして作れないものなのか」

そこで、市民に関わる時間を多く使うためにも、調べる時間を短縮することが重要であるという考えに行きつきました。一方、近年においては、DXの進展により、提出の手続き自体は以前よりもスムーズになってきましたが来客応対に関する部分にはまだ多くの時間を要しています。

そこで提案したいのが、

SHORTCUTアプリの開発です。「今までは六法に指を挟み、法令を行ったり来たり、通知を見に行ったり、右往左往していたあの時間を取り戻すのです」

このアプリは「法令、告示、通知、逐条解説がAIを活用してワンクリックで紐づき、一画面で確認でき、場所を問わず、どこでも使える手軽さがあります」

このアプリがあれば消防職員が判断をするために必要な情報を整理し、結論に至るまでの無駄な時間を減らすための仕組みであるため、判断をアプリに任せるものではありません。

アプリには時間を生み出すだけでなく、全職員が統一した指導を行うことができるメリットがあります。

また、相談者にとっても、アプリで容易に必要な設備を知ることができ、応対時間や来庁時間の削減となります。

削るべきなのは、「調べる時間、探す時間、迷う時間」です。

「限られた4000週間の中で本当に使うべき時間を市民の安全のために使う」

「消防業務において現場は選べない。生み出された時間を市民の方々に還元するために」



命を守る声のカタチ

中国支部代表

有吉彩華

東備消防組合消防本部（岡山県）

高校生の時に自宅で父が倒れ、その時駆けつけてくれた女性救急隊員の心ある活動に胸を打たれ、救急救命士になることを目指しました。現在消防歴10年目を迎えます。命の最前線でひとりひとりの命と真摯に向き合う心ある活動を胸に。優しさと強さを兼ね備えた女性消防士を目指して日々現場活動に取り組んでいます。

「火事です。火事です。火災が発生しました。」この音を聞けば、誰もが非常事態を直ちに認識し、必要な行動をとることができます。しかし、その命を守る声は本当にすべての人に届いているのでしょうか。

私は、ある避難訓練の指導中、指示が聞き取れず、身動きがとれなくなった高齢女性の姿を目の当たりにしました。難聴を抱える方でした。情報を受け取ることすらできない人がいる現実を突きつけられた瞬間でした。

日本には、約38万人の聴覚障害者がいます。火災報知器、館内アナウンス。現在の災害情報の多くが、音声に依存しています。

近年はバリアフリーの進歩に伴い、障害があっても一人で外出することは当たり前の時代となりました。一方で、消防設備の多様化がその発展に追いついていないことにわたしは危機感を抱きました。誰もが同じタイミングで危険を知り、同じ安全が得られる社会の実現が必要です。

そこで私は、命を守る声を平等に届けられる災害情報アプリ、「One アラート」の導入を提案します。

このアプリは、避難が複雑化する大型商業施設を対象とします。通知方法は音声メッセージ、イラスト、光、振動など、利用者側が自由に選択できることとし、内容は、災害の種類、避難経路、エレベーター使用不可といった情報です。アプリはスマートフォンの位置情報機能と連動させ、施設内にいる利用者にものみ通知する仕組みとし、避難完了やSOSボタンを設けることで、安否報告も可能とします。

このアプリの最大の特徴は、情報ツールの一元化です。現在、災害情報の導入は施設ごとに委ねられていて、その普及率は十分といえません。全施設共通型のアプリとすることで、どの施設でも

利用者の特性に応じた方法で伝達できます。高価な機械は必要なく、低コストでの実現が可能です。まずは、既に施設独自のアプリを導入している大型商業施設から本機能を連携する形で導入を進め、実証を重ねながら段階的に拡大を目指していきます。

この利点は3つあります。1つ目は、避難状況の可視化です。これまでの災害情報は一方通行の発信でした。双方向型とすることで、救助をする私たちも避難者数の把握や搜索支援のツールとして活用できます。

2つ目は、災害の種類を問わず情報伝達できることです。災害によって伝達手段が異なることは、情報格差や混乱を生じるリスクを高めます。自然災害のみならず、特殊災害や人為災害にも対応できる仕組みとすることで一貫した情報提供ができます。

そして最後は、聴覚障害者のみならず、幅広い対象者への活用が期待できることです。海外観光客や高齢者など、現状のアナウンスだけでは情報が伝わりにくい人たちは他にも多数存在します。ピクトグラムや多言語機能などアプリであれば多様な形の情報伝達可以实现できます。また、アラーム音によってパニックになる方たちのためには、聞き慣れた家族の声を録音できるなど、音声の工夫を図ることも可能とします。

「One アラート」。ここには、一つの声でひとりの命も取りこぼさない。という想いを込めました。

あの日取り残されていた聴覚障害者の姿。私たち消防は、すべての命を守るため常に進化していく使命があります。

目で見えて、耳で聞いて、手で感じて。すべての人に届く消防のメッセージ。あなたの命を守る新しい声のカタチ。



「予備消防職員制度」任期付短時間勤務の 消防職員として

四国支部代表

赤松 一樹

西予市消防本部（愛媛県）

平成30年に当市で運用を開始した准救急隊員として、令和4年から救急出張所に勤務しており、拝命以前に消防吏員として勤務していた豊富な経験を活かして業務に精通し、円滑な現場対応を行っています。人柄は穏やかで協調性が高く、職員からの信頼も厚い安心感のある職員です。

皆さんは「准救急隊員制度」をご存じでしょうか？

私は現在、西予市消防本部で准救急隊員を務めています。

准救急隊員は、救急要請があれば、他の消防吏員とともに災害現場に出動します。ただし、任期三年の期間限定職員です。

准救急隊員制度は、過疎地域の救急サービスの充実を図るため、平成二十九年の法改正で誕生しました。この制度により、以前は資格を持つ消防吏員三名で行っていた救急業務は、うち一名を、一定の講習を修了した准救急隊員で対応できるようになりました。

西予市では、准救急隊員として市役所職員や私のような期間限定の職員が勤務に就き、今まで夜間の救急車の配備が難しかった明浜地域でも、二十四時間の配備が可能となりました。その結果、現場到着時間を平均で十一分四十秒短縮する成果を上げています。

私が准救急隊員になったきっかけは、友人からの声掛けでした。私は以前、正規の消防吏員をしていましたが、高齢の両親から柑橘農家を継ぐため、愛媛に戻っていました。紹介を受けた当初は、再び仕事が務まるか不安でしたが、初めて消防士になったときの「誰かの役に立ちたい」という気持ちを思い出し准救急隊員になりました。現在は週に二回勤務をし、休日には柑橘栽培を学んでいます。

このような経緯を経て、准救急隊員になった私ですが、今回このような発言の機会をいただき、考えたことがあります。

それは、「消防の仕事を離れた人の中にも、資格や経験を活かし、再び誰かの役に立ちたいと思っている人がいるのではないか」ということです。もしそうであれば、この人材を活かすことができなんでしょうか。

そこで私は、新たな制度として「予備消防職員制度」の導入を提案します。

現在、救急業務を行うには、救急救命士資格や救急課程などの修了が必要です。しかし、こうした資格は、消防の仕事を離れると、これを活かす機会がほとんどありません。

実際、全国には約七万を超える救急救命士が登録されていますが、そのうち約九千人は業務に従事していない「潜在救急救命士」というデータがあります。

また、消防学校などで救急課程を修了したものの、退職や転職で現場を離れた人も各地に存在します。

一方で、南海トラフ地震などの大規模災害の発生が危惧される今、その被害想定に対し、人材不足は大きな課題です。

そこで、こうした資格者を事前に登録し緊急時に消防署に招集し、業務に従事してもらう「予備消防職員制度」の導入が必要です。

大規模災害が発生した際に、招集した人が救急業務に携わることができれば、他の火災や救助現場に、多くの消防吏員を向かわせることができるかもしれません。

また、被害のない地域であっても、この制度が運用できれば、被災地に向け、より多くの緊急消防援助隊を向かわせることが出来るようになるかもしれません。

そのためには、日ごろから、地域に眠る資格者を把握し、協力依頼できる体制構築が必要です。

一度消防の仕事を離れ、再度、准救急隊員として働く者として、また南海トラフ地震の発生が危惧される地域の住民として、みなさんの街にもいるかもしれない、「気持ち」と「資格」を持った人を、地域の防災力の強化につなげる、そんな仕組みの創設を期待します。



ポイントで広げる救命の輪

九州支部代表

戸田 開斗

天草広域連合消防本部（熊本県）

平成30年に地元天草で消防士を拝命、救急救命士としての救急活動等の中で「天草地域の救命率を向上させるにはどうしたらいいだろうか。」と考えた時に、「救命の輪」の重要性に着目しました。その重要性をいかに天草の皆さんに周知するのか。今回、お得な「ポイント」をテーマに、私の取り組みと想いを伝えます。

「胸骨圧迫と人工呼吸はできますか？」119番通報を受ける指令室で、私は何度もこの質問をしてきました。

しかし返ってくる答えは「できません…」

心肺停止の現場に駆け付けると、そこには、ただ泣き崩れるしかない人の姿があります。そして、その隣でまた一つ命が消えていく。

私が勤務する天草地域は、広い地理的条件により、救急車の現場到着平均時間が、熊本県全体の平均時間より約50秒長くかかるという課題があります。

心肺蘇生が1分遅れるごとに生存率が大きく下がるため、この50秒は決して小さくなく、生死を分ける鍵となります。

しかしながら、「自分にはできない」「難しそう」と救命講習の受講をためらう方も少なくありません。

皆さんに問いかけます。自分の家族、友人、大切な人が倒れた時、助ける準備はできていますか。

講習を受けることは、自分のためではなく、愛する人を守るためのものです。

たった数時間の学びが、誰かの命を守る力になるのです。

みんな分かっているはずなのに、どうしたら救命講習を受講してくれるのだろうかと考えました。

そこで私は、救命講習をもっと身近に感じてもらう方法として「ポイント制度」を思いつきました。

受講すると買い物や公共サービスで利用できるポイントが付与される仕組みです。人は「役立つ

から学ぶ」だけでなく「得するから参加する」という動機でも行動します。その一歩が命を守る力を身につけることにつながるなら、入口はどちらでも構わないのです。

この発想をさらに広げる中で、熊本健康アプリを活用した「天草健康ポイント事業」に結び付けられるのではないかと考えました。

このアプリは、県民の健康づくりを目的に熊本県内の市町村が共同で運営しており、ポイントが貯まると、ポイントに応じた特典を受けることができます。

このアプリとの連携を始めた結果、受講者は昨年同時期の約6倍になりました。

私はこの取り組みを通して感じたことがあります。救命の輪は、知識や技術の伝達だけでなく、参加のきっかけをどう作るにかかっているということです。

最初の動機が「ポイント獲得」であったとしても、講習を受けた市民は実技を通して「自分もできる」という自信にかわり、「いざという時は必ず行動したい」と口にされます。その変化こそが、私たちが目指す真の成果なのです。

命を救う行動に「最初の一歩」を踏み出してもらうための仕掛けとして、このポイント付与は大きな力を持っています。そして、その一歩が積み重なることで、地域全体に救命の輪が広がっていきます。

私たち消防職員にできるのは、市民に寄り添い、学びやすい場を提供し、その背中を押し続けることです。

私は信じています。小さなポイントが、大きな命の重みへとつながり、やがて確かな救命の輪を築いていくことを。どうか皆さん、「ポイントで広げる救命の輪」を熊本から全国へと繋げていきましょう！

きっと、皆さんの心の中では、大切な人を守る準備ができているはずですから…



火災除染で職員の健康と市民の安全を守る

北海道支部代表

荒木 敬太郎

札幌市消防局（北海道）

勤続4年目の消防士で、現在北消防署警防課新琴似出張所で機動水槽隊員として勤務しており、より困難性の高い災害に出動対応し、日々の自己研鑽に励んでいます。

「黒く煤けたヘルメットこそが、修羅場を潜った消防士の勲章である」かつては当たり前だったこの「ダーティヘルメット症候群」という価値観は、今、私たちの命を脅かす最大の敵へと変わりました。WHOが発表した「消防士が現場で浴びた煤は、がんのリスクを劇的に高める」という事実は、決して無視できません。

しかし、現状ではどうでしょうか。過酷な現場活動を終えたとき、私たちは疲労困憊です。煤がついていなくても、煙を浴びたら汚染されるのはわかっている。でも、汚染された化学物質を取り除く火災除染を行えば、装備は濡れて重くなるし、片付けも面倒だ。少し汚れただけならこのまま帰っても大丈夫だろう。これが私自身の本音でした。私と同じく、頭では火災除染の必要性がわかっている、なかなか実行できていない人が多いはず。この「一時の妥協」が、取り返しのつかない代償を生んでいることに気付かなければなりません。

私はここで、火災除染を組織の「文化」として定着させることを提言します。これには、私たちの組織を守る、二つの大きなメリットがあります。

第一に、自分、仲間、そして家族の命を守れることです。目に見える煤や空気中に漂っている有害物質は、皮膚や呼吸から私たちの体に悪影響を及ぼします。まずは、火災現場ではマスクの着用を徹底すること。さらに、自分だけではなく、汚れた装備を署に持ち込めば、共に働く仲間に煤をまき散らし、汚れた体のまま家に帰れば、大切な家族にもその危険を広げることになります。この火災除染を行うことで自分だけではなく、仲間や家族を守ることができるのです。

第二に、市民サービスの質が向上します。火災除染は、単なる後片付けではなく、次の出動のための準備です。汚れた装備のまま次の現場へ向かえば、助けるべき市民のもとへ、私たちが有害物質を持ち込むこととなります。市民に二次被害を与えることは、許されません。現場で確実に煤を落とし、万全な状態で次の出動に対応していくことが、市民サービスの向上につながります。

では、このメリットを享受するために、多額の予算や最新の設備が必要でしょうか。いいえ、

違います。「設備がないからできない」と諦める必要はありません。高価な設備がなくても、今ある資機材でできることは山ほどあります。現場で引き揚げる前に筒先からの放水による水的除染、皮膚についた有害物質を簡易的に取り除く、ふき取り除染、帰署後の徹底した洗浄と即座のシャワー。今日から全員ができることがあるのです。特別なことではなく「当たり前の準備」として、先輩が後輩へ、その重要性を引き継いでいく。この文化の継承こそが、次世代の消防士が健康で働き続けられるために必要なのです。

火災現場から煙が消えても、私たちの戦いは終わっていません。煤を落とし、完全に除染するまでが火災活動です。煤という古い勲章を捨て、除染という新しい文化を作りましょう。その未来を創るのは、今ここにいる私たちです。今日から、当たり前の火災除染を、当たり前の文化へ。新しい消防の歴史を切り拓きましょう。



ワンストップ救急子育てサポート

東北支部代表

千葉 友理恵

一関市消防本部（岩手県）

東日本大震災を経験したことから消防士を目指し、平成27年4月に消防吏員を拝命、予防業務に取り組むとともに、救急救命士の資格を持ちながら、救助隊員としても災害現場の第一線で活躍しています。

何事にも積極的に取り組む姿勢は、上司や同僚はもちろんのこと、地域住民からの信頼も厚く、将来を嘱望される職員です。

私はこれまで数多くの救急活動に携わる中で、119番に対して心理的な大きな壁があること、特にも子育て世代が緊急時に感じる不安を痛感してきました。

先日、子どもの発熱による熱性けいれんで、私が救急出場した事案のことです。

お母さんは、不安に押しつぶされ、「119番していいのか分からなかった。」と涙ながらに話しました。お母さんはまず、自分の母親へ電話し、救急車を呼んでもいいのか相談したそうです。

その姿は、かつて私自身が子育てをする中で抱いた不安と全く同じであり、心が締め付けられる思いでした。

子どもの突発な発熱・嘔吐・夜間の急変。子どもがそばで泣き叫んでいる…。親であれば誰もが経験し、その度どうしたら良いのか迷います。

そこで私は、子育て世代に寄り添い安心して子育てができる環境づくりのため、「ワンストップ救急子育てサポート」を提案します。ワンストップとは、氾濫している情報を一つにまとめ、「ここを見れば必要な支援に必ず行き着く」という情報の入り口を一本化する仕組みです。

当消防本部では、乳幼児健診時に心肺蘇生法を指導しています。今までは心肺蘇生法の手技にこだわり、覚えてもらうことがゴールだと思っていましたが、実は、目の前の育児に精一杯なお母さんたちにとって大切なのは、子どもの具合が悪くなった時の不安を解消してあげることなのではないでしょうか。

そこで、この乳幼児健診において、これまでの取り組みに加えて「ワンストップ救急カード」を作成して配付します。

このカードは、母子手帳に挟まるサイズとし、当消防本部のホームページに直接アクセスできる

よう二次元コードを掲載します。二次元コードからスマートフォンでアクセスすると、症状の見極め方や対処方法などをすぐに確認することができます。母子手帳は子育て期間にずっと使用するツールであり、必ず持っているため、迷った時にすぐ確認できるメリットがあります。

そして、このカードの最大の目的は、緊急時に慌てず行動できる助けとすることです。そのために、次の二つのことが分かるようにします。

一つ目は、119番の通信指令員が必要とする基本的情報です。住所、年齢、性別、かかりつけの病院やいつからどんな症状があるのかなどを一覧にしてまとめます。

二つ目は、119番のタイミングです。子どもの発熱、けいれん、嘔吐など、特に不安を感じやすい場面を取り上げ、どのような点を観察し、どの段階で119番すべきかを明示します。

スマートフォンでの情報収集が主流の時代、サイト内を見やすくするため、必要な情報を一つのページに集約し、迷わず確認できるようにします。

実際にお母さんに掲載内容を説明したところ「カードだと携帯しやすい、スマホならすぐ繋がって便利、119番で何を伝えればいいのか理解できた。」との意見をいただき、スマートフォンでの情報提供が有用だと確認できました。

また、すでに制度としてある「#8000」、「#7119」の相談窓口情報をカードに記載し、子育て環境の不安を取り除きます。

消防の使命は、「命を守ること」にとどまりません。安心して頼れる存在であることも、地域住民からの信頼を得るために欠かせない要素です。不安を抱えて孤立しやすい子育て世代が、もしもの時に、落ち着いて行動できる環境を整えることが重要です。

様々な情報であふれている時代だからこそ、ワンストップでいつでも寄り添い、子育てサポートの一端を消防が担うことで、地域の安全・安心なまちづくりの向上に繋がるものと確信します。



もう一つの使命

関東支部代表

関口雄大

桐生市消防本部（群馬県）

「人の命を救いたい」その思いを胸に消防士となり、現在8年目を迎える職員です。昨年度は、消防救助技術指導会で全国大会へ出場し、現在は救助隊として人命救助の最前線に立つとともに、救急隊としても活動しています。本日は、救急現場での経験を通じて、何を感じ、何を使命としてきたのかをお話します。

「救う者として使命を果たさなければならない。」

私たち消防職員には「命を救う」という重要な使命があります。しかし同時に、「救えない命」と向き合わなければいけません。目の前で大切な人を失った家族が、深い悲しみの淵に沈むとき、私たちに何ができるのか。その問いに対し、私は「グリーフケア」という視点から向き合う必要があると感じています。

私たち消防職員にとって「グリーフケア」は聞き馴染みのない言葉です。「グリーフ」とは、大切な人を失った際に感じる深い悲しみのこと、「ケア」とは、寄り添い支えること。その二つを掛け合わせた「グリーフケア」は、ご遺族の深い悲しみに寄り添い、前を向こうとするその歩みを援助する行為なのです。主に終末期医療や福祉分野で使われる「グリーフケア」ですが、急性期医療を担う私たちこそ「グリーフケア」という「もう一つの使命」を果たさなければいけないのです。しかし、現状はどうでしょう。救急現場においては、傷病者の救命処置に全力を尽くす中で、救急搬送後の家族への配慮が疎かになっていないでしょうか。

私自身、心肺停止の傷病者を病院へ搬送した際、必死な活動の末に救命できなかった経験があります。病院の待合室では家族が声も出さずただ肩を震わせていました。そんな家族が私に言いました。「『行ってらっしゃい。』と声をかけたのが最後でした。」そうやって泣き崩れた家族に対し、声をかけようとしたのですが、何も言葉が出てきませんでした。静寂の中、私は小さく頭を下げその場を去りました。無言のまま立ち去る私の姿を見て、家族はどう思うのか。私の胸には無力感だけが残り続けました。

多くの消防職員が一度はこの経験をし、やり場のない思いを感じたことがあるはずです。そこで私は、救急隊としてできる新たなアプローチ「救急隊版グリーフケア」を考案し実践しました。それ

は病院へ搬送後、次の出動までの限られた時間を家族に寄り添うための時間とする取り組みです。まずは服装を整え、脱帽し、家族と目線を合わせ、深く一礼します。そして、落ち着いた声で伝えます。「お辛い中、我々にご協力くださり、ありがとうございます。」その一言をきっかけに、家族のこみ上げる言葉に傾聴し、共感します。言葉にならない想いを抱える家族には、無言を恐れず寄り添い続けました。

すると、家族の表情がわずかに和らぎ始めたように感じました。さらには、遅れて駆けつけた別の家族に対し、自ら声をかけ、寄り添う姿があったのです。この出来事は、救急隊の言動が、家族の「これから」に変化をもたらし、「救急隊版グリーンケア」の実用性を確立させました。そして所属で取り入れた結果、どんな出動でも、救急隊が家族に寄り添う時間を意識的に確保し、大切にしている行動が現場に根付いていったのです。

私たちの使命は命を救うこと。しかし、どんなに手を尽くしても、救えない命がある。そんな救えなかった命のすぐそばには、これからを生きる家族がいる。その家族に寄り添うグリーンケアは、私たちの「もう一つの使命」です。たとえ、次の出動までのわずかな時間でも、家族の人生に寄り添える瞬間は必ずある。その一瞬が、残された家族の「これから」を支える力となり、心に「生きる力」を与えるのです。

救えなかった命のその先に、まだ「救える心」がある。

「あなたは一人ではありません。」



手話を消防の第2言語に ～災害現場に“共通の手”を～

関東支部代表

佐藤 文哉

横浜市消防局（神奈川県）

消防隊、救急隊、予防係員、指令管制員などさまざまな業務を経験してきたオールラウンダーな消防職員。

仕事には常に100%の力で挑み、休日には5歳と1歳の子どもたちと120%の力で遊んでいます。

手話の勉強を始めてから今年で20年。その経験を生かして、災害現場での新たな伝達方法の可能性に挑戦します。

みなさん、災害現場を思い出してください。車両のエンジン音、サイレンの音、建物が燃える音、ガラスが割れる音。災害現場で我々消防職員は、さまざまな「音」が鳴り響く世界で活動しています。「ホース!」、「放水はじめ!」、「建物倒壊危険あり!退避!」。隊員の飛び交う声、怒号、無線の音。喧騒の中で正しい情報を得るのは容易ではありません。私たちは聞こえない、聞こえづらい状況下で声だけを頼りに活動しているのではないのでしょうか。火災現場で面体を装着して屋内進入すると、自分の声は思うように通らず、仲間の声もはっきりとは聞こえません。NBC災害で防護服を着ると、さらに声が聞こえづらくなります。「今、自分は何をもとめられているのか?」、「こちらの状況はちゃんと伝わっているのか?」。不安や焦りを感じて活動した経験は、一度や二度ではありません。声以外に確実な伝達方法があれば、それが私の思いでした。

私は特技として手話ができます。10年前から初任教育生を対象とした人権啓発研修に関わり、また3年前から横浜消防の中で手話の勉強会を立ち上げました。ここでは、実際に聴覚に障害もっている方と手話通訳士の指導のもと、聴覚障害に関する知識の勉強と、災害現場で聴覚障害者に会った時でも手話でコミュニケーションができる技術を磨いています。

このような活動を行っていく中で、私はあることに気がつきました。「基礎的な手話の単語を消防職員どうしの共通言語として使えないだろうか」と。災害現場のような「音のある世界」、聴覚障害者が生きる「音のない世界」。双方は相反するようで必要な情報が得られにくいという共通点があります。私は今から3つの手話を行います。

「要救助者発見!」、「建物倒壊危険あり!」、「退避!」。これは手話の表現としてすでに存在して

います。これを声と併せて災害現場で使えば、耳からの情報に加えて視覚的にも情報が得られ、伝達はより速く、より確実に伝わります。

災害現場で使える手話単語の検討と災害現場を想定した訓練は、私たちが立ち上げた勉強会ですで行っています。これを初任教育及び現任教育の必須科目とし、横浜消防全体に広げたいと考えています。さらに全国の消防本部へ波及させ、応援出場でも初対面の部隊どうしで意思疎通ができる、そんな現場の実現が可能です。

私たちは市民の命を守るため現場に立っています。だからこそまず守るべきは、共に戦う仲間の命です。声だけに頼らない新しい現場の言語をつくる、私は手話を消防の第2言語にし、消防の現場にもうひとつの安全装備を加えたいと思います。

全国消防職員意見発表開催経過

第1回	昭和53年5月19日	東京都日比谷公会堂(東京)	第31回	平成20年6月6日	東京ビッグサイト(東京)
第2回	昭和54年5月24日	京都市京都会館(京都)	第32回	平成21年10月29日	ホテルグランヴィア広島(広島)
第3回	昭和55年5月29日	東京都九段会館(東京)	第33回	平成22年5月21日	ホテルニューオータニ幕張(千葉)
第4回	昭和56年5月20日	神戸市神戸国際会館(神戸)	第34回	平成23年6月8日	ANAクラウンプラザホテル神戸(神戸)
第5回	昭和57年5月27日	名古屋市公会堂(名古屋)	第35回	平成24年6月20日	札幌コンベンションセンター(札幌)
第6回	昭和58年6月2日	京都市国立京都国際会館(京都)	第36回	平成25年6月26日	リーガロイヤルホテル小倉(北九州)
第7回	昭和59年5月30日	箱根小涌園「グリーンパレス」(川崎)	第37回	平成26年5月28日	ホテルメトロポリタン仙台(仙台)
第8回	昭和60年6月14日	大阪市「森ノ宮ピロティホール」(大阪)	第38回	平成27年5月23日	ホテルコンコルド浜松(浜松)
第9回	昭和61年5月28日	広島市厚生年金会館(広島)	第39回	平成28年6月9日	ハイアットリージェンシー大阪(大阪)
第10回	昭和62年5月28日	横浜文化体育館(横浜)	第40回	平成29年5月24日	ウェスティンナゴヤキャッスル(名古屋)
第11回	昭和63年5月24日	東京都国立劇場(東京)	第41回	平成30年6月1日	東京ビッグサイト(東京)
第12回	平成元年6月15日	福岡サンパレス(福岡)	第42回	令和元年5月29日	グランドハイアット福岡(福岡)
第13回	平成2年5月30日	名古屋市公会堂(名古屋)	第43回	令和2年9月1日	動画審査(広島)
第14回	平成3年5月30日	京都市京都会館(京都)	第44回	令和3年8月5日	動画審査(熊本)
第15回	平成4年5月28日	仙台国際センター(仙台)	第45回	令和4年6月8日	パシフィコ横浜 会議センター(横浜)
第16回	平成5年5月27日	テルメインターナショナルホテル(札幌)	第46回	令和5年5月31日	ロームシアター京都(京都)
第17回	平成6年6月5日	大阪国際交流センター(大阪)	第47回	令和6年5月30日	フェニーチェ堺(堺)
第18回	平成7年5月25日	名古屋市公会堂(名古屋)	第48回	令和7年5月30日	広島国際会議場(広島)
第19回	平成8年5月23日	パシフィコ横浜会議センター(横浜)			
第20回	平成9年6月12日	京都市国立京都国際会館(京都)			
第21回	平成10年6月5日	東京国際フォーラム(東京)			
第22回	平成11年5月27日	仙台サンブラザホール(仙台)			
第23回	平成12年6月1日	新神戸オリエンタルホテル(神戸)			
第24回	平成13年5月31日	リーガロイヤルホテル小倉(北九州)			
第25回	平成14年7月24日	国立京都国際会館(京都)			
第26回	平成15年6月5日	広島国際会議場(広島)			
第27回	平成16年5月26日	幕張プリンスホテル(千葉)			
第28回	平成17年5月26日	ホテル日航熊本(熊本)			
第29回	平成18年6月7日	パシフィコ横浜会議センター(横浜)			
第30回	平成19年6月7日	名古屋国際会議場(名古屋)			